迷える者は道を問わず

元京都府立大学名誉教授でいらっしゃった西元宗助(にしもとそうすけ)(1909～1992) 先生は、親鸞聖人の教えを大変喜ばれた方でした。
ご生前中、『在家仏教』という月刊誌に、「人生の旅路」と題した味わい深い文章を寄せておられましたので、ご紹介したいと思います。

それは大学卒業後、軍隊の召集を受けて台湾におられた時のことです。

先生は十数名の仲間の兵隊の先頭に立って、台北の町外れにある熱帯植物園を目指して歩いておられたのですが、どうしたことか中々その植物園に行き着けないのです。
少し不安な気持ちになっていた時、仲間の若い兵隊の一人が「オイ、ちょっと待て」といって駆け出し、街角のタバコ屋のおばさんに植物園の道を尋ねたそうです。
すると、そのおばさんは、あきれたような顔をして「道が違いますよ。来た道を引き返さなくては」と言って、親切に道順を教えてくれたのです。おかげで一行は何とか、植物園にたどり着くことが出来たということです。

その時、道を聞いた兵隊が、「オイ西元、迷える者は道を問わずやな」と言ったというのです。

この言葉を聞いた先生はハッとされ、まだ二十歳過ぎたばかりのその若い兵隊に、この言葉を誰に教えてもらったのか尋ねたのです。
するとその青年は、地べたに指で「迷者不問道」と書きながら、僕は君とは違って田舎の小学校しか出ていないんだ。で、僕の知っている漢文はこれだけなんだ、と言いながら次のような話をしてくれたのです。

「高等小学校を卒業の日に、受け持ちの先生が次のように言われた。
　いよいよこれで諸君とお別れになる。ところで、この中には家庭の事情などもあって上の学校に進まないで、直ちに実社会に出て勤める者もいる。
こう先生は仰せになりながら、私たちの顔をじっと見つめられて、諸君の将来のことをアレコレと想い、実は昨夜はあんまり眠ることが出来なかった。そこで思いついたのであるが、上の学校に進む者を含めて諸君に一つ、自分が平素から大切にしている言葉を、諸君の卒業のはなむけの言葉として差し上げようと思う。
それはといって黒板に大きく書かれたのがこの、迷える者は道を問わず、の文字でした。
そして先生は、あらためて我々一人一人の顔を見渡しながら、よいか、この言葉を忘れないで、つねに謙虚に心をむなしうして、分からないことは何事も、信頼のおける人々に問い尋ね、教えをこうことが大切です。
このような心がけさえ持ち続ければ、実社会がそのまま生きた本当の学校になりましょうと、このように言われたのです」
と、目を輝かせながら、その若き兵隊が話してくれたのです。

この話を聞かれた西元先生は、知ったかぶりをして道を尋ねようとしなかったご自分の行動を大いに恥じ、この兵隊さんを教育された名もなき小学校の先生の「迷える者は道を問わず」という言葉に、深く心を打たれたとおっしゃっておられます。

確かに私たち人間は、少しばかり知恵や知識が身についてきますと、何もかも分かったような顔をして、人に問い尋ねることをしなくなります。
聞けばいいのに、「こんなこと今さら聞けん。沽券(こけん)にかかわる」というはからい心が邪魔をするのです。
この「はからい心」のもとにあるものが驕慢心(きょうまんしん)（おごり、たかぶり、自惚れ）という煩悩なのです。

つまり、「迷える者は道を問わず」という「迷える者」とは、そういった驕慢心に振り回され、知ったかぶりをしている人のことを言うのです。

もっと言えば、迷っているの迷っていることに気付いていない人のことです。なぜなら、自分は迷っていると気付けば、正しい道を問わずにはおれなくなる筈です。迷っていることが分かっておらないから道を問おうとしないのです。

こうやって、わずかばかりの知識をひけらかして、まじめに道を問い尋ねることもせず、迷いに迷いを重ねているのが、私たちなのです。
まことに滑稽で、また愚かしいことであります。

まずは、この小学校の先生が言われるように、何事も、謙虚に、心をむなしうして教えをこうことが何より大事なことだと思います。

これは、仏法をお聞かせいただく場合も同じです。
親鸞聖人のお作りになった『正信念仏偈』には次のような一節があります。

弥陀仏本願念仏
邪見驕慢悪衆生
信楽受持甚以難
難中之難無過斯

意訳すれば、お念仏の教えは、はからい心（おごり、たかぶり、よこしまな心）を以ってしては、信じることは不可能であるということですが、まさに心をむなしくしなければ、教えは耳に届かないのです。

また、教えを聞くことで今一つ大事なことは、人の言うことをただ聞きさえすれば良いというものではないということです。

先ほどの植物園への道を尋ねる場合でも、タバコ屋のおばさんが正しい道を知っていたからよかったようなものの、もし誤った道を教えられていたらどうなっていたか、考えれば分かることです。

つまり、それが正しい教えかどうか、見極めるということが大事になってくるのです。
だから、小学校の先生も、信頼のおける人に聞きなさいと念を押しているのです。

文明社会と言われながら、いっこうに迷信があとをたたないのも、おかしげな宗教がはびこるのも、何が正しいのかという見極めをせず、安易に人の言説を信じるところにあるのです。

何が正しくて正しくないか？

仏法を聞く上で、これが一番大事なことだと思います。

親鸞聖人は「同じ宗教といっても偽の宗教、気休めの宗教があります。真実の宗教を求めねばなりません」とおっしゃっています。

偽の宗教とは「幸、不幸の原因を日や方角のせいにしたり、占いやまじないに頼るような宗教」です。
気休めの宗教とは「理論的に間違ってはいないのですが、私の実践不可能な教えで、私の苦悩の解決にならない宗教。一時の気休めの宗教」です。
真実の宗教とは「私自身と私の苦悩を明らかにして、それを解決してくれる宗教」です。

くれぐれも、偽の宗教や間に合わせの宗教に惑わされないようにして下さい。そうして真実の宗教（念仏のみ教え）を求めて頂きたいと思います。

平成２０年７月　　「光明寺だより５７号」より